



藤江啓子 著『資本主義から環境主義へ：アメリカ文学を中心として』（英宝社、2016年、2,376円）

西谷，拓哉

---

(Citation)

アメリカ学会会報, 194:8-8

(Issue Date)

2017-07-30

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

© 2017 Takuya Nishitani. All rights reserved.

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006010>



藤江啓子 著

『資本主義から環境主義へ』

——アメリカ文学を中心として』

(英宝社, 2016 年, 2,376 円)

エコクリティシズムがアメリカ文学研究に導入されて久しいが、中心的に論じられてきたのは現代作品であったように思われる。20 世紀以降、深刻な自然破壊、環境汚染が顕在化したことからすれば当然のことであろう。だが、その根源は建国から 19 世紀までの近代化にあったのであり、本書は全 9 章にわたりにその時代の作家を取り上げ、環境主義という観点から古典的アメリカ文学を読み直すとともに、比較的なじみの薄い作品にも光を当てることで、現代につながるアメリカ環境文学の端緒と系譜を描き出そうとする。

第 1 章において超越主義からエコフェミニズムに至る思想的変遷が概観され、第 3 章ではクレヴクール、エマ・ラザルス、ホイットマンの作品を通して、アメリカが移民の増大とともに国土を膨張させ、産業経済を拡大する過程が描かれる。第 2 章において著者は環大西洋的な文脈を設定し、英国のピューリタン革命を資本主義の起源と措定して、ミルトンの詩に「勤勉、儉約、節約」といった美德が謳われていることを指摘しつつ、「楽園喪失」から「楽園回復」に至るナラティヴに、資本主義の旧世界から新世界への移行を重ね合わせている。

第 4～7 章には 19 世紀の都市化、工業化との関わりからホイットマン、レベッカ・ハーディング・デイヴィス、メルヴィルを扱った作品論が並び、特に読み応えがある。第 4 章ではホイットマンが「ローカルな環境主義者」として、人口増加とともに経済格差が広がり、不衛生になっていくニューヨークを憂い、新聞記事と詩作を通して環境正義を訴えたとする視点が新鮮である。第 5 章ではデイヴィスの短篇「製鉄工場の生活」(1861) が後年のマックレイカーにも通じる産業小説の嚆矢とされ、移民労働者の劣悪な労働環境と工業廃棄物による汚染に関して重厚な論が展開される。第 6・7 章ではメルヴィルの 1850 年代の短篇「乙女たちの地獄」と「ピアザ」に即して詳細なレトリック分析がなされ、男性の語り手が女性工場労働者の苦境や山中に住む独身女性の孤独な姿にアメリカの「闇」を認めつつも、それがトラウマとなることを恐れ、結局は安全な場所に逃げ込む様が批判される。

「ピアザ」論では「風景」が重要な鍵概念になっているが、第 8・9 章においても「アメリカ的風景」を媒介として 19 世紀と現代の接続が図られる。前者ではソローとロバート・フィンチの作品に共通するケープコッドという場所をめくり、「周遊」「エッジ」「変化」といった概念から人間と自然の深い関係が語られる。後者では逆に、ロマン主義的な海の描写に潜む「人間中心主義」が、いかに『白鯨』において、更にニュージーランドの現代詩人イアン・ウェッドの作品において脱却され、海は人間以外の生物もまた同等(以上)の権利で「共有する」環境であるという考えに変化したのかが示される。19 世紀のアメリカ文学を今世紀の「エコグローバリズム」に結びつけるスケールの大きな論考だが、それは本書全体についても言える。

西谷拓哉(神戸大学)